

『放送メディア研究』第17号 刊行にあたって

1925（大正14）年3月22日、社団法人東京放送局（NHKの前身）が東京・芝浦の小さなスタジオでラジオ放送を始めてからまもなく100年を迎える。この間、日本国内の放送メディアは、さまざまな技術の進展に伴ってその形態を多様化させてきた。

放送における技術革新は、その時々を受け手である視聴者のニーズに応え、または新たなニーズを創出し、人々の暮らしを豊かにし、世相や文化に彩りを加えてきた。その一方で、社会に浸透することのないまま消えていったものも少なくない。

本特集の前半では、ラジオ・テレビの放送技術が、それぞれ時代ごとに、どのように社会に受容され、定着していったのかをたどっている。その過程を時系列にトレースすることで見えてくるのは、放送技術の革新が放送番組の切り口や伝え方にも影響を及ぼし得ることだ。それが人々に浸透するかどうかは、その時代の社会状況と無縁ではない。新たな放送技術は、受け手のニーズに応じた新たなコンテンツ・サービスとして結実してこそ、社会の情報インフラとして根づき得ることを学ぶことができる。

21世紀に入りまもなく四半世紀が経過する今、デジタル情報空間の急拡大に伴う弊害がクローズアップされている。インターネット上で拡散する誤情報・偽情報や誹謗中傷の問題、フィルターバブルによる社会の分断などは、このまま放置すれば健全な民主主義の維持を危うくしかねない深刻な社会課題となっている。

その一方で、市民一人一人がインターネットを介してみずから自由に

発信できるようになったことで、マスメディアが社会のなかの情報発信を独占していた時代は終わった。放送というオールドメディアから一方通行で発信されるコンテンツに対して、受け手の疑念や反発の声が増え、マスメディアに対する不信は、かつてなく強まっている。

こうした社会状況のなかで、これからの放送メディアに求められる役割や機能とは、どのようなものなのか。本特集の後半では、最先端の放送技術をふまえ、メディアの未来像にも焦点をあてている。放送技術100年の歴史をコンテンツの伝え方、および送り手と受け手との関係性という視点もふまえて検証することで、今後私たちが放送を通じて社会に提供すべき新たな価値とは何かを考えていきたい。

放送と通信が融合する時代の新たなメディア像を模索し、マスメディアへの信頼を再び取り戻すための一つの道しるべとして役立てていただけたら幸いである。

2024年3月

NHK放送文化研究所
所長 渡辺 健策